



## VIAGGIO IN ITALY

大森愛子のイタリア紀行

AIKO OMORI PRESENTI

10

2014.12.03

# 日本の治安の良さを 基準とするならば日本以外に 住めるところはない

海外に滞在するとなると、気になることのひとつは、その国の治安です。

イタリアの治安はというと、日本に比べて悪いのはもちろんですが、世界的に見れば、まあ普通なんじゃないかな、と思います。

日本のように、マクドナルドで荷物を席に置いたまま店内をウロウロして注文、戻ってきても自分の席に荷物がちゃんとある、そんな国の方が珍しいのであって、例えばローマでは、路肩に自転車を止める時、チェーンで近くのフェンスか木にタイヤをくくりつけておくのはもちろん、サドルにも鍵をかけておかなければ、サドルだけ抜いて持って行かれてしまいます。サドルってそんなに高く売れるものなのでしょうか。サドル泥棒が本当に多いローマですが、何が目的なのかはいちわかりません。

## 落書きかアートか

ローマは観光地であるにもかかわらず、とにかく落書きが多く、道もゴミだらけ。映画「ローマの休日」気分で町歩きをすると、ガッカリしてしまうかもしれませんが、これがローマの日常風景です。

巨大な落書きがマンションやビルの壁一面に施されていることも多く、地下鉄の電車はもともとの塗装の色がわからないほど落書きだらけ、何本かに一本は日本のデコトラかと思紛うような派手な電車が走ってきます。

この大作を一体いつの間に描いているんだろうと感心しそうですが、車内にまで及ぶ落書きの跡を見ていると、きっと地下鉄会社が黙認しているのでしょう。防止策がとられていないため、地下鉄の電車は落書き放題です。

こうした建造物への落書きは古代ローマ時代から行われていたとも言われ、歴史ある悪戯は今やすっかりローマの街の風景に馴染み、ほったらかし。落書きを消して町中をまわろうなどと殊勝な心がけを持つ



ローマの電車はこんな感じです



全面くまなく落書きが



車内の落書きはいつ行われるのでしょうか…



## VIAGGIO IN ITALY

### 大森愛子のイタリア紀行

AIKO OMORI PRESENTI

人はいません。

しかし中には、消されるのが惜しいほどレベルの高いものも多く、それらは単なる落書きか、ストリートアートと見なすのか、その線引きは難しいところです。

歴史的建造物への安易な落書きが非難されるのはもちろんですが、その一方で、秀逸な落書きを見学して町を巡るツアーも度々開催されており、気合の入った落書きが住民に楽しみを与えていることも確かなのです。

## 一流のコソ泥と正直な警察官

殺人やテロといった重大犯罪はそれほど多くないイタリアですが、観光地でのスリや引ったくりなど、コソ泥がとにかく多い。

マスケな私はこれまで二度スリに合ったことがあります、いずれも1人ではなく、友人と連れ立って歩いている時のことでした。盗られた本人はもちろん、一緒にいた友達の誰もが、いつ、どこにスリらしき人物がいたのか、さっぱりわからないのです。盗んだことさえ気付かせない…その鮮やかな手口はまるで手品のよう。などと感心している場合にはありませんが、あらゆる分野で一流を極めた職人が存在するイタリア。プロのスリ師の腕前も超一流です。

翌日。友人の発案で警察に被害届を出しに行くと、待合室には青ざめた顔の被害者がたくさん。日常的に行われている窃盗のおかげで、届けを出すのも順番待ちです。

それにしても時間がかかる。イライラ。イタリアのお役所仕事に迅速さや正確さを期待してはいけません。話が通ることの方が少ないのですから。役所関係の事柄は「時間がかかる」「一貫性がない」「制度が年中変わる」「人によって言うことが異なる」これらのことを頭に叩き込んで挑むのです。

心を無にして観察していると、被害者の悲痛な思いを聞かされ続けるのがよっぽど疲れるのか、対応する警察官の小休憩がもう、やたらと多い。

やーっと私の番!と思ったら「ちょっと待ってて…。エスプレッソ飲んだらすぐやるから…。」

これでは待ち時間も長くなるはずです。

数分後、スッキリした表情で戻ってきた警察官に事情を説明し、その後、空手について話が盛り上がり、彼が愛するカタをいくつか眺めて取り調べは終わりました。



マンションの側面に巨大な狼!



ピラミデ駅近く



いつも彼がひとりで作業しています



## VIAGGIO IN ITALY

### 大森愛子のイタリア紀行

AIKO OMORI PRESENTI

帰り際、しっかり者の友人が、「もし見つかったら、ここに電話してよね!」  
と調書に電話番号を書いてくれたのですが、その時の警官の言葉を  
よく覚えています。

「戻ってこないよ。」

「盗られたものが戻って来る事は無いんだ。」

そ、そんなはっきり。…でも確かに。イタリア旅行へは盗難保険に  
加入してから出かけましょう。

失ったものはいつか必ず、かたちを変えて戻ってきます。



スペイン広場駅の地下道



スペイン広場駅の地下道



ジョアン・ミロの落書き(としてみると楽しい)

